

例えこの恋に気付いて貰え
ないとしても



みなと劉



目次

前書き	2
1	2
2	3
3	4
4	5
5	6
6	7
7	8
8	10
9	11
10	12
11	14
12	16
13	18
後書き	1

前書き

はじめに

恋とは、必ずしも声に出せるものではなく、伝えられるものでもない。

けれど、たとえ届かなくても、そばにいるだけで満たされる気持ちがある。

本を通じてつながるふたりの時間、何気ない会話のなかに生まれる温もり、そして、決して言葉にしない思い。

本作は、そんな淡く静かな恋を描いた物語です。

もし、あなたの心のどこかにそっと寄り添うものがあれば、それ以上の幸せはありません。

ページをめくるたび、あなたにも「誰かを想う気持ち」のやさしさが届きますように。

2

放課後の図書室は、静かな波のように時間が満ちては引いていく。窓から差し込む斜陽が、ページの隅を淡く染め、指先をほのかに温める。私はそっと息を吐き、開いた本の行間を見つめた。

——君は、今日もここにいるんだね。

視線を少しだけ上げる。カウンターの向こう側、貸し出し処理をしている君の横顔。何度見ても、初めて見るような気がする。髪が頬にかかるその瞬間まで、全部目に焼き付けたいのに、じっと見つめることはできない。ただ、遠くから、ひそやかに見守るだけ。

この想いは、きっと伝わらない。

けれど、それでもいい。

私は、本のページをめくる。君が振り向かないうちに。

紙の擦れる音が、静寂の中で微かに響く。文字を追うふりをしながら、意識のほとんどは君に向いていた。

君は相変わらず、貸し出しの処理を終えると、一冊の本を手にとってページをめくる。毎日同じように。君の指が紙をなぞる仕草も、伏せがちなまつげの影も、何度見ても見飽きることがない。

ふと、誰かが君に話しかける声があった。私は慌てて目を落とし、開いたページをじっと見つめる。けれど、耳だけが勝手に君の声を探してしまう。

「……ああ、これは前にも読んだことがあるんだ」

そう答える君の声が、優しく、静かで、心の奥をかすめていく。君は、本を読むのが好きだ。私も、そうだ。本が好きな理由も、読む時間も、違うかもしれないけれど、同じようにページをめくる手を持っている。そのことが、少しだけ嬉しい。

「また読んでるの？」

別の誰かが笑う。君は、かすかに微笑んで、「うん」と答えた。

いいな。君とそんなふうに、自然に話せる人がいるなんて。

私は、そっと本を閉じる。ページの文字は、とうに頭に入ってこなかった。息を潜めるように席を立ち、そっと図書室をあとにする。君の視界に入らないように。気づかれないように。

この想いが、永遠に届かなくてもいい。

それでも、君がここにいるということが、私には何よりも大切だった。

図書室の扉を静かに閉めると、廊下にひんやりとした空気が漂っていた。窓の外では、夕陽がゆっくりと沈んでいく。橙色の光が床に長い影を落とし、私の歩みとともに揺らいでいた。

君の声がまだ耳の奥に残っている。あの柔らかな響きが、心のどこかを切なく震わせる。でも、私は知っている。君は私の名前さえ知らない。

それでいい。

それでいいんだ。

けれど、不意に足が止まる。廊下の角を曲がる前、もう一度だけ振り返ってしまった。扉の向こうには、まだ君がいる。私は、何を期待していたんだろう。君が私の存在に気づくことを？ それとも、たった一度でいいから、君の目に映ることを？

馬鹿みたいだ、と自分で笑う。こんなにも心が揺れるくせに、結局私は何もできないまままだ。ただ君のいる場所を遠くから眺めて、気づかれぬまま過ごす。それだけの毎日。

でも、それでも。

明日もまた、私はここへ来るんだろう。君がいつもの席で本を開く姿を、そっと見守るために。

もしも奇跡があるのなら。

この淡い恋が、ほんの少しだけ君の世界に触れることができるのなら。

……そんなことを願ってしまう私は、やっぱり少しだけ欲張りなのかもしれない。

翌日も、私は図書室へ向かった。授業が終わり、廊下のざわめきが次第に遠ざかる頃、静かに扉を押し開く。

君は——いた。

いつものカウンターの向こうで、貸し出し処理を終えた後、一冊の本を開いている。昨日と同じように、いや、きっとずっと前から変わらない日常。私の存在なんて、やっぱりどこにもない。

それでも、私はそっと奥の席に座り、手に取った本を開いた。文字を追うふりをしながら、君の姿を静かに感じる。そうするだけで、少しだけ満たされた気持ちになる。

——でも、その日は違った。

ふと気づくと、君がこちらを見ていた。

一瞬、時間が止まった気がした。

私を、見ている？ そんなはずはない。きっと、偶然だ。視線がたまたま合っただけ。そう思おうとしたのに、心臓が跳ねるように脈打って、息が詰まりそうになる。

君は、すぐに目を伏せ、また本へと視線を落とした。まるで、何事もなかったかのように。

……ただ、それだけのこと。

けれど、私の中には小さな波紋が広がっていた。気のせいだと思いたいのにも、どうしても忘れられない。君の視線が、一瞬でも私に向けられたということ。

私は本を閉じ、胸にそっと手を当てる。

——もしかしたら。

それが、ただの偶然ではなかったら？

そんな小さな期待を抱いてしまう私は、やっぱりどうしようもなく、恋をしているんだと思った。

6

それからの日々、私はますます君を意識するようになってしまった。

図書室に入るたび、君の姿を探してしまう。ページをめくるたび、君がどんな本を読んでいるのかが気になってしまう。君の仕草や視線の先、少しの変化まで目で追ってしまう自分に気づくたび、胸の奥が苦しくなる。

でも、君はいつも通りだった。私に気づいている様子もなく、本の世界に没頭し、たまに誰かと短く言葉を交わし、静かに時を過ごしている。あの日の視線も、やっぱり気のせいだったのだろう。私はただ、一瞬の偶然を、勝手に意味のあるものだと思ったただけ。

——それでも。

それでも、図書室に来ることをやめられなかった。

好きになればなるほど、この想いは言葉にならなくなる。もしも私が勇気を出して話しかけたら、君はどんな顔をするだろう？ 優しく微笑むだろうか。それとも、不思議そうに首をかしげるだろうか。

考えるたび、怖くなる。

君の静かな世界に、私の存在を持ち込んでしまうことが。

だから、やっぱりこのままでいい。このまま、気づかれないまま、遠くから見ているだけで。

そう思っていたのに、その日の帰り際、思いがけず君とすれ違った。

図書室を出てすぐの廊下。私は考えごとをしていて、前をよく見ていなかった。

「あっ……」

ほんの少し、肩が触れた。驚いて顔を上げると、すぐ目の前に君がいた。

距離が近い。

君の目が、すぐそこにある。

「ごめん、大丈夫？」

君の声が、すぐ近くで響く。

言葉が出なかった。ただ、かすかに首を振るだけで精一杯だった。君は一瞬、不思議そうに私を見つめたあと、ふっと微笑んで、「そっか」と言って歩き去った。

私は、しばらくその場から動けなかった。

君の声が、耳に残っている。

君のぬくもりが、肩に残っている。

それだけのことなのに、胸がこんなにも高鳴っている。

私はぎっと、今日のことを何度も思い出してしまうのだろう。君の視線も、声も、微笑みも。ほんの少しでも、君の世界に触れられたことを、忘れられないまま。

家に帰っても、君の声が頭の中で繰り返されていた。

——「ごめん、大丈夫？」

たったそれだけの言葉なのに、何度も何度も思い返してしまう。君の瞳の色、ほんの一瞬見せた表情、触れた肩のぬくもり。それらが胸の奥にしつこく残って、どうしようもなくなる。

こんな気持ちになるつもりじゃなかった。

ただ、遠くから見ているだけでよかったのに。気づかれなくてもいいはずだったのに。

私は、ベッドの上で目を閉じる。静かな部屋の中、夕方の廊下の光景だけがはっきりと浮かぶ。君とすれ違った瞬間、君が見せた微笑み。それを思い出すたびに、どうしようもなく心がざわめく。君と

——「そっか」

その言葉の意味を、私は知らない。君はただ、それ以上話すことがなかったから言っただけなのかもしれない。でも、もしかしたら。ほんの少しでも、私に何かを感じたのだとしたら。

そんなふうを考えてしまう私は、やっぱり欲張りだ。

それでも、明日もまた図書室に行こう。君がいる場所に。君が本を開く静かな時間の中に、そっと紛れ込むために。

もし、君がまた私を見つけてくれたら。

もし、あの日の視線が偶然ではなかったのだとしたら。

そんな小さな願いを抱えながら、私は静かに目を閉じた。

次の日、図書室の扉を開けると、やはり君はそこにいた。

いつもの席で、本を開き、静かにページをめくっている。窓から差し込む午後の光が、君の髪を淡く照らしていた。その姿を見るだけで、胸が少し苦しくなる。

昨日のことを君は覚えているだろうか。肩が触れたこと、言葉を交わしたこと、あの一瞬の微笑みを。

私はそっと奥の席に座り、いつものように本を開く。でも、文字はまったく頭に入ってこなかった。心は、君の存在にばかり引き寄せられてしまう。

そして、不意に。

「……ねえ」

驚いて顔を上げると、君がこちらを見ていた。

まっすぐな瞳が、私を捉えている。

「昨日、廊下でぶつかったよね」

心臓が跳ねる。君が、話しかけてくれた。私に向かって、私のことを覚えていてくれた。

「……うん」

やっこの思いで声を出す。君は少し微笑んで、それから、ふと考えるように視線を落とした。

「君、よくここにいるよね」

どきりとする。

気づかれていた？　ずっと、ただ静かに君を見つめていただけなのに。気づかれることなんてないと思っていたのに。

「……うん、本が好きだから」

絞り出すようにそう答えると、君は少し意外そうな顔をして、それから優しく笑った。

「そっか。僕も」

それは、知っている。君が本を読むのが好きなことも、毎日ここにいることも、ずっと見ていたから。

でも、君が私のことを見てくれたことは、知らなかった。

それだけで、胸がいっぱいになる。

この恋が、ほんの少しだけ君の世界に触れた気がした。

9

それから、君と少しだけ話すようになった。

最初は、ほんの短い言葉だけだった。

「今日はどんな本を読んでの？」

「うん、これは……」

そんな何気ないやりとりが、私には信じられないくらい嬉しかった。

君の声を、私に向けてもらえること。君の視線が、私を捉えてくれること。

それだけで、胸がふわりと浮くような気がした。

そして、気づいてしまう。

私は、君と話せることが嬉しくて、本を開く時間が減ってしまった。

君と同じ時間を過ごすことに夢中で、文字を追うことさえ忘れてしまうなんて。

「この作家、好きなの？」

「うん。昔から、よく読んでる」

「へえ……じゃあ、おすすめの本とか、ある？」

君は私の言葉に少し驚いたような顔をして、それからすぐに、ふっと優しく笑った。

「うん、あるよ」

そう言って、君が本棚から一冊の本を手取る。その仕草が、いつもより少しだけ近くに感じられる。

「これ、読んでみて。きっと気に入ると思う」

私はそっとその本を受け取る。君の指先が、ほんの一瞬、私の手に触れた。

それだけで、心臓が跳ねる。

——どうしよう。

こんなに、好きになってしまった。

君に気づいてほしくないと思っていたはずなのに。

今は、君の世界に、もっと触れてみたいと思ってしまう。

君が手渡してくれた本を、私は大切に抱えながら図書室を後にした。

表紙を眺め、指で背表紙をなぞる。君が選んでくれた本。君が「きつと気に入る」と言ってくれた物語。

ページをめくる前から、もうこの本が愛おしくて仕方がなかった。

家に帰るとすぐにベッドに腰掛け、そっと本を開く。

——けれど、文字を追っても内容が頭に入ってこない。

何度も君の声がよみがえる。

「これ、読んでみて」

その優しい響きも、指先が触れた一瞬の感触も、胸の奥をくすぐるように残っている。

ページの上を滑る視線は、すぐに止まってしまふ。ふと目を閉じれば、君の横顔が浮かぶ。

——どうしよう。

今までただ遠くから見つめているだけでよかったはずなのに。

君と話すたびに、君の声を聞かされたときに、もっと知りたいと思ってしまう。

もし、君が私のことをなんとも思っていなかったら？

この優しさが、ただ誰にでも向けられるものだったら？

考えるほどに怖くなる。でも、それでも、明日もまた図書室に行こうと思う。

君がいる場所へ。

君がくれた、この小さなつながりを、大切にしたいくて。

ページを閉じ、そっと本を抱きしめる。

淡い期待を抱えたまま、私は眠りについた。

11

次の日の放課後、私はいつもより少しだけ早く図書室へ向かった。

君より先に着いて、昨日渡された本を広げなかった。君のおすすめて、一番に読んでいたかった。

扉を開けると、まだ人は少なく、静寂が支配していた。窓際の席に座り、昨日の夜に読み進めたページを開く。

——けれど、文字は相変わらず頭に入ってこなかった。

昨日の夜も、今日の朝も、何度も読み返したのに。君のことばかりが心を占めて、物語の世界に入り込めない。

「……読めてる？」

不意に声をして、はっと顔を上げた。

君がいた。

驚いた私の視線を受けて、君は少しだけ困ったように笑っていた。

「ずっと同じページ開いてるから」

そんな細かいこと、君は気づいていたんだ。

「……えっと、ちょっと、考えごとしてたから」

私は慌てて本を閉じる。すると、君は軽く首を傾げた。

「つまらなかった？」

「そんなことない！」

思わず声が大きくなる。君が少し驚いた顔をしたので、私は慌てて言葉を選んだ。

「その、ちゃんと読んでよ。ただ、いろいろ考えながら読んで……」

「いろいろ？」

君は私をじっと見つめる。

その視線に、胸の奥がまたざわめく。

「……秘密」

冗談めかしてそう言ってみると、君は一瞬驚いたあと、小さく笑った。

「そっか。でも、読んでくれてるならよかった」

「うん。ちゃんと最後まで読むよ」

だから、君もまた私におすすめの本を教えてくれるだろうか。

もっと、君の好きなものを知ることができるだろうか。

小さな願いを胸に抱きながら、私はもう一度、本のページを開いた。

君と話す時間が、少しずつ増えていった。

図書室で、静かな本棚の陰で、放課後の穏やかな光の中で。

最初はほんの短い会話だった。

「この作家、他にも読んでる？」

「うん。でも、この本は初めてだった」

そういう話を交わすたびに、君の表情の変化を知った。少し驚いたような顔、考え込むときに視線を落とす癖、気に入った話題のときに自然と微笑む仕草。

気づけば、私はそれを知ることになった。

君がどんなことを思うのか、どんな言葉を選ぶのか、どんなふうに世界を見ているのか。

昨日よりも今日、今日よりも明日、もっと君を知りたいと思う気持ちが募っていく。

だけど、その気持ちは私だけのもので、君には知られないままでもいいとも思っていた。

君の隣で、本を読んで、時々会話を交わせればそれでいい。

それだけで、十分に幸せだった。

——でも、ある日。

「……………ねえ」

君が、不意に私を呼んだ。

「ん？」

本から顔を上げると、君は少しだけ迷うような顔をしていた。

「その……」

言い淀む君を見るのは珍しかった。私は少し緊張しながら、次の言葉を待った。

「……来週、学校が終わったあと、どこか行かない？」

心臓が、大きく跳ねた。

「どこか、って……?」

「うん、本屋とか。カフェとか……」

まっすぐな視線に、息を飲む。

これは、ただの友達としての誘いなのかもしれない。

でも、もし。

もし、ほんの少しでも違う意味があったとしたら。

「……うん、行きたい」

気づけば、答えていた。

君が、小さく微笑む。

その笑顔が、いつもより少しだけ特別に見えた気がした。

約束の日。

放課後の空は澄んでいて、静かに傾く陽が街を淡く染めていた。

私は君と並んで歩いている。それだけで胸がいっぱいで、言葉がうまく出てこなかった。

「どこに行こうか」

君が穏やかに問いかける。

「……本屋に行きたい」

そう答えると、君は嬉しそうに頷いた。

並んで歩く距離は、図書室で隣に座るよりもずっと近く感じた。

それなのに、どこか遠くにいるような気もする。

——私は、君の特別になれるのだろうか。

そんなことを考えながら、本屋の扉をくぐる。

君は棚を眺めながら、時々私の方を振り返って、ふっと微笑んだ。

「これ、きっと気に入ると思う」

そう言って、君が一冊の本を手渡してくれる。

その瞬間、私は思った。

この手を、君が差し出してくれるのなら。

この気持ちを、そっと預けてもいいのだろうか。

私は、そっと本を受け取った。

手のひらに残る温もりが、君との時間が、本のページとともに心に刻まれていく。

君は、きっとこの気持ちには気づかない。

でも、それでもいい。

こうして君の隣で、君の好きなものを知って、同じものを大切にできるのなら。

それだけで、私は十分だった。

夕暮れの街を歩く帰り道、私はそっと君の横顔を見つめた。

——例えこの恋に気づいてもらえないとしても。

それでも、私は、君のことが好きだった。

(完)

後書き

おわりに

この物語を最後まで読んでくださり、ありがとうございました。

淡くて、静かで、けれど確かにそこに存在する恋心を描きたいと思い、この作品を書きました。誰かを想う気持ちは、必ずしも伝わるものではないかもしれませんが。それでも、ただそばにただで満た

される瞬間がある。そんな繊細な感情のひとつひとつを、読んでくださった方にも感じてもらえたなら、とても嬉しく思います。

恋の形は人それぞれで、答えはひとつではありません。この物語の続きを想像するのも、またひとつの楽しみ方かもしれません。

この物語が、あなたの心の片隅に、そっと残りますように。

また、どこかでお会いできますように。

(作者より)

例えこの恋に気付いて貰えないとしても

著 者 みなと劉

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
